

Oracle® Database

Companion CD クイック・インストール・ガイド

10g リリース 2 (10.2) for Linux Itanium

部品番号 : B25925-01

原典情報 : B15679-01 Oracle Database Companion CD Quick Installation Guide 10g Release 2 (10.2) for Linux Itanium

2005 年 12 月

このマニュアルでは、Oracle Database 10g Companion CD に含まれている製品を Linux Itanium システムにすばやくインストールする方法を説明します。内容は、次のとおりです。

- このマニュアルの概要
- Companion CD 製品をインストールするための要件
- Companion CD 製品のインストール手順の開始
- インストール時の製品固有情報の指定
- インストールの完了
- インストール後の作業
- ドキュメントのアクセシビリティについて
- サポートおよびサービス

1 このマニュアルの概要

このマニュアルでは、次のインストール・タイプのインストール手順を説明します。

- Oracle HTML DB インストール・タイプ
このインストール・タイプには、次の製品が含まれます。
 - Oracle HTTP Server
 - Oracle HTML DB
- Oracle Database 10g Products インストール・タイプ
このインストール・タイプには、次の製品が含まれます。
 - Oracle JDBC Development Drivers
 - Oracle SQLJ
 - Oracle Database Examples
 - Oracle Text Supplied Knowledge Bases
 - Oracle Workflow Server
 - Oracle Ultra Search
 - ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ
 - JPublisher
- Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプ
このインストール・タイプには、次の製品が含まれます。
 - Oracle Workflow 中間層コンポーネント
 - Oracle HTTP Server

注意：

このマニュアルでは、Oracle Database Companion CD インストール・メディアに含まれる製品を示すために Companion CD 製品という用語を使用しています。これに対して、Oracle Database 10g Companion Products という用語は、Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプに含まれる製品を示すために使用しています。

オペレーティング・システムの正式名称である Linux Itanium を、このマニュアルでは短縮して Linux としています。

このマニュアルで提供されていない情報

このマニュアルでは、次の情報は提供されません。

- インストールの要件が満たされていることを確認するための詳細な手順
- Companion CD 製品を使用する前に実行する必要があるインストール後の作業
- Companion CD 製品の使用方法

追加インストール情報の入手先

Oracle Database 10g Companion CD 製品のインストールの詳細は、このマニュアルで説明されていないタスクに関する情報を含め、『Oracle Database Companion CD インストール・ガイド for Linux Itanium』を参照してください。

このマニュアルはインストール・メディアに含まれています。これにアクセスするには、Web ブラウザを使用してインストール・メディアの companion ディレクトリにある welcome.htm ファイルを開きます。「ようこそ」ページで、「ドキュメント」タブを選択します。

2 Companion CD 製品をインストールするための要件

次の各項で、Companion CD 製品をインストールするための要件を説明します。

- ハードウェアおよびソフトウェアの動作保証
- Oracle ソフトウェアをインストールするための一般的な要件
- Oracle HTML DB インストール・タイプから Oracle HTTP Server をインストールするための要件
- Oracle HTML DB インストール・タイプから Oracle HTML DB をインストールするための要件
- Oracle Database 10g Products をインストールするための要件
- Oracle Database 10g Companion Products をインストールするための要件

2.1 ハードウェアおよびソフトウェアの動作保証

このマニュアルの発行後に新しいバージョンのプラットフォームおよびオペレーティング・システム・ソフトウェアが動作保証されている可能性があるため、Oracle MetaLink の次の Web サイトで動作保証情報を確認する必要があります。

<http://www.oracle.com/technology/support/metalink/content.html>

2.2 Oracle ソフトウェアをインストールするための一般的な要件

Oracle ソフトウェアをインストールするための一般的な要件は、次のとおりです。

- root ユーザーとしてのシステムへのログイン
サイレント・インストールを実行する場合を除いて、ソフトウェアは、X Window System ワークステーション、X 端末または X サーバー・ソフトウェアがインストールされている PC またはその他のシステムからインストールする必要があります。
- 必要なオペレーティング・システム・グループの設定
Oracle ソフトウェアを初めてシステムにインストールするときに、Oracle インベントリ・グループが存在しない場合は、作成する必要があります。このグループは、システムにインストールされているすべての Oracle ソフトウェアのカatalogである Oracle インベントリを所有します。通常このグループに選択される名前は oinstall です。
- 必要な Oracle ソフトウェア所有者ユーザーの設定
Oracle ソフトウェア所有者ユーザーは、所定のインストール中にインストールされるソフトウェアのすべてを所有します。このユーザーは、Oracle インベントリ・グループをプライマリ・グループとして持つ必要があります。次の条件が 1 つでも成立する場合は、Oracle ソフトウェア所有者ユーザーを作成する必要があります。
 - Oracle ソフトウェア所有者ユーザーが存在しない。この条件は、Oracle ソフトウェアのシステムへのインストールが初めての場合に成立する場合があります。
 - Oracle ソフトウェア所有者ユーザーは存在するが、異なるオペレーティング・システム・ユーザーを使用する必要がある。

Oracle ソフトウェア所有者ユーザーが存在しても、プライマリ・グループが Oracle インベントリ・グループの場合は変更する必要があります。

注意： このマニュアルでは、Oracle ソフトウェア所有者は oracle と呼ばれています。

- Oracle ベース・ディレクトリの設定

Oracle ベース・ディレクトリは、Oracle ソフトウェア・インストールのトップレベル・ディレクトリとして機能します。Optimal Flexible Architecture (OFA) のガイドラインでは、Oracle ベース・ディレクトリに次のようなパスを使用するよう推奨されています。

```
/mount_point/app/oracle_sw_owner
```

この例では、次のようになります。

- `mount_point` は、Oracle ソフトウェアを含むファイル・システムのマウント・ポイント・ディレクトリのフルパスです。
- `oracle_sw_owner` は、インストールの実行に使用するオペレーティング・システム・ユーザー名と同じ名前を付けたディレクトリです。

- Oracle インベントリ・ディレクトリの設定

初めて Oracle ソフトウェアをコンピュータにインストールするときに、Oracle Universal Installer から Oracle インベントリ・ディレクトリのパスを指定するよう求めるプロンプトが表示されます。それ以降の Oracle ソフトウェアのインストールでは、すべて同じ Oracle インベントリ・ディレクトリが使用されます。

- Oracle ホームの設定

異なる Oracle 製品または同じ Oracle 製品の異なるリリースは、別々の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールする必要があります。Oracle Universal Installer を実行するたびに、このディレクトリのパスと名前を指定するよう求めるプロンプトが表示されます。

- oracle ユーザーの環境の構成

oracle ユーザーの環境を構成するには、次の設定が必要です。

- シェル起動ファイルで、デフォルトのファイル・モード作成マスク (`umask`) を 022 に設定します。
- `DISPLAY` 環境変数を設定します。
- `ORACLE_HOME` および `TNS_ADMIN` 環境変数が設定されていないことを確認します。

2.3 Oracle HTML DB インストール・タイプから Oracle HTTP Server をインストールするための要件

Oracle HTML DB インストール・タイプから Oracle HTTP Server をインストールするための要件は、次のとおりです。

- [Oracle Database の要件](#)
- [ハードウェアの要件](#)
- [ソフトウェアの要件](#)

2.3.1 Oracle Database の要件

実行するには、Oracle HTTP Server が Oracle9i Database リリース 9.2.0.3 以降のインスタンスにアクセスできる必要があります。Oracle Database は、Oracle*Net を使用してアクセス可能であれば Oracle HTTP Server とは別のシステム上にあってもかまいません。ただし、Oracle HTTP Server はそれ自身のホームにあることが必要です。

2.3.2 ハードウェアの要件

システムは、次の最小ハードウェア要件を満たしている必要があります。

- 512MB の物理 RAM
- 512MB のスワップ領域
- /tmp ディレクトリ内の 125MB の空きディスク領域
- ソフトウェア・ファイル用の 530MB のディスク領域

システムがこれらの要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. 物理 RAM のサイズを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# grep MemTotal /proc/meminfo
```

システムにインストールされている物理 RAM のサイズが必要なサイズに満たない場合は、追加のメモリーをインストールしてから続行する必要があります。

2. 構成されているスワップ領域のサイズを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# grep SwapTotal /proc/meminfo
```

追加のスワップ領域の構成方法は、必要に応じてご使用のオペレーティング・システムのマニュアルを参照してください。

3. /tmp ディレクトリ内の空きディスク領域の量を調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k /tmp
```

/tmp ディレクトリの空きディスク領域が 125MB 未満の場合は、次の手順の 1 つを実行します。

- 不要なファイルを /tmp ディレクトリから削除します。
- oracle ユーザーの環境を設定する場合は、TEMP および TMPDIR 環境変数を設定します。
- /tmp ディレクトリを含むファイル・システムを拡張します。ファイル・システムの拡張方法は、必要に応じてシステム管理者に確認してください。

4. システムの空きディスク領域の量を調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k
```

5. ソフトウェアを実行できるシステム・アーキテクチャかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# grep "model name" /proc/cpuinfo
```

このコマンドではプロセッサ・タイプの出力が予測されます。プロセッサのアーキテクチャが現在のリリースの要件に一致することを確認してください。

注意： 予測された出力が表示されない場合、このシステムにはそのソフトウェアをインストールできません。

2.3.3 ソフトウェアの要件

システムは、次の表に示すソフトウェア要件を満たしている必要があります。

項目	要件
オペレーティング・システム	次のオペレーティング・システム・バージョンの1つであること。 ■ Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 (Update 4 以上) ■ Red Hat Linux 4.0 (Update 1 以上) ■ SUSE Linux Enterprise Server 8.0 (SP 4 以上) ■ SUSE Linux Enterprise Server 9.0 (SP 2 以上)
カーネルのバージョン	システムで次のカーネル・バージョン (またはそれ以上) が動作していること。 Red Hat Enterprise Linux 3.0 の場合 2.4.21-20.EL Red Hat Enterprise Linux 4.0 の場合 2.6.9-11.EL SUSE Linux Enterprise Server 8.0 の場合 2.4.21-278 SUSE Linux Enterprise Server 9.0 の場合 2.6.5-139
Red Hat Enterprise Linux 3.0 用のパッケージ	make-3.79.1-17 control-center-2.2.0.1-13 gcc-3.2.3-47 gcc-c++-3.2.3-47 gdb-6.1post-1.20040607.52 glibc-2.3.2-95.30 glibc-common-2.3.2-95.30 glibc-devel-2.3.2-95.30 glibc-devel-2.3.2-95.20 (32 bit) compat-db-4.0.14-5.1 compat-gcc-7.3-2.96.128 compat-gcc-c++-7.3-2.96.128 compat-libstdc++-7.3-2.96.128 compat-libstdc++-devel-7.3-2.96.128 gnome-libs-1.4.1.2.90-34.2 (32 bit) libstdc++-3.2.3-47 libstdc++-devel-3.2.3-47 openmotif-2.2.3-3.RHEL3 sysstat-5.0.5-5.rhel3 setarch-1.3-1 libaio-0.3.96-3 libaio-devel-0.3.96-3

項目	要件
Red Hat Enterprise Linux 4.0 用のパッケージ	binutils-2.15.92.0.2-10.EL4 compat-db-4.1.25-9 control-center-2.8.0-12 gcc-3.4.3-9.EL4 gcc-c++-3.4.3-9.EL4 glibc-2.3.4-2 glibc-common-2.3.4-2 gnome-libs-1.4.1.2.90-44.1 libstdc++-3.4.3-9.EL4 libstdc++-devel-3.4.3-9.EL4 make-3.80-5 pdksh-5.2.14-30 sysstat-5.0.5-1 xscreensaver-4.18-5.rhel4.2
SUSE Linux Enterprise Server 9 用のパッケージ	gcc-3.3.3 gcc-c++-3.3.3 glibc-2.3.3 libaio-0.3.102-1.2ia64 libaio-devel-0.3.102-1.2ia64 make-3.80
PL/SQL ネイティブ・コンパイル、Pro*C/C++、Oracle Call Interface、Oracle C++ Call Interface、Oracle XML Developer's Kit (XDK)	Intel C++ Compiler 8.1 以上およびディストリビューションに関して前述したバージョンの GNU C および C++ コンパイラが、これらの製品で使用できるようにサポートされていること。 注意： Intel C++ Compiler v8.1 以上がサポートされますが、インストールに必須ではありません。Red Hat Enterprise Linux 3 では、OCCI は GNU C++ コンパイラのバージョン 3.2 でサポートされています。これがコンパイラのデフォルトのバージョンです。OCCI は、gcc 3.2.3 標準テンプレート・ライブラリにより Intel Compiler v8.1 でもサポートされます。 Oracle XML Developer's Kit は、Red Hat Linux 4.0 の GCC ではサポートされていません。Intel C++ Compiler (ICC) のみサポートされています。 Red Hat Enterprise Linux 4.0 では、Oracle C++ Call Interface (OCCI) は GCC 3.4.3 をサポートしていません。Red Hat Enterprise Linux 4.0 で OCCI を使用するには、GCC 3.2.3 をインストールする必要があります。
Oracle JDBC/OCI Drivers	Oracle JDBC/OCI ドライバでは、次のどのバージョンの JDK でも使用できますが、インストールに必須ではありません。 ■ Sun JDK 1.4.2

システムがこれらの要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. オペレーティング・システムのディストリビューションおよびバージョンを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# cat /etc/issue
```

2. 必要なカーネルがインストールされているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r
```

Red Hat Enterprise Linux 3.0 システムでは、出力は次のようになります。

```
2.4.21-20.EL
```

この例では、出力にカーネル・バージョン (2.4.21) およびエラータ・レベル (20.EL) が示されています。エラータ・レベルが 20 より小さい場合、最新のカーネル・アップデートをインストールしてください。カーネル・アップデートは Red Hat Network から入手できます。

SUSE Linux Enterprise Server 9 システムでは、出力は次のようになります。

2.6.5-7.201

この例では、出力にシステムのカーネル・バージョンが示されています。カーネル・バージョンが 2.6.5-7.201 より小さい場合、オペレーティング・システムのベンダーにカーネル・アップデートの入手およびインストール方法を確認してください。

3. 必要なパッケージがインストールされているかどうかを調べるには、対象となる各パッケージごとに次のようなコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがインストールされていない場合は、Linux ディストリビューションのメディアからインストールするか、または必要なパッケージのバージョンを Linux のベンダーの Web サイトからダウンロードしてください。

2.4 Oracle HTML DB インストール・タイプから Oracle HTML DB をインストールするための要件

Oracle HTML DB インストール・タイプから Oracle HTML DB をインストールする場合、システムが次の要件を満たしていることを確認する必要があります。

- Oracle Database の要件

Oracle HTML DB には、リリース 9.2.0.3 以上のリリースの Oracle Database が必要です。Oracle HTML DB は、Oracle HTTP Server が含まれている Oracle ホームにインストールする必要があります。この Oracle ホームは、Oracle HTML DB が Oracle*Net を使用してこのデータベースにアクセスできるかぎり、Oracle Database のホームとは異なる物理サーバー上に置くことができます。

- ディスク領域の要件

Oracle ホームを含むファイル・システムに、少なくとも 355MB の空きディスク領域があることを確認してください。

Oracle ホームに十分な領域があることを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k /httpserver_oracle_home_path
```

- Oracle HTTP Server の要件

Oracle HTML DB には、実行するために Oracle HTTP Server および mod_plsql へのアクセスが必要です。

- Oracle XML DB の要件

使用するデータベースに、Oracle XML DB がインストールされている必要があります。

- Oracle Text の要件

検索可能なオンライン・ヘルプを Oracle HTML DB で使用できるようにするには、Oracle Text がインストールされている必要があります。

- ブラウザの要件

Oracle HTML DB アプリケーションを表示または開発するには、Web ブラウザが JavaScript、HTML 4.0 および CSS 1.0 標準をサポートしている必要があります。

2.5 Oracle Database 10g Products をインストールするための要件

Oracle Database 10g Products をインストールする場合、システムが次の要件を満たしていることを確認する必要があります。

■ Oracle Database の要件

Oracle Database 10g Products インストール・タイプから製品をインストールする前に、使用中のシステムが Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) の Oracle ホームにアクセスできることを確認する必要があります。

■ ディスク領域の要件

Oracle ホームを含むファイル・システムに、少なくとも 1194MB の空きディスク領域があることを確認してください。

■ Oracle Workflow Server の要件

Oracle Workflow Server の要件は、次のとおりです。

- フレーム、JavaScript、Java Development Kit (JDK) バージョン 1.3.1 および AWT をサポートする Web ブラウザ (たとえば、Netscape Communicator バージョン 4.76 または以降の 4.7x バージョン、あるいは Microsoft Internet Explorer バージョン 5.0x または 5.5x など)。
- wfdoc.zip ファイルから Workflow HTML Help を抽出するための unzip ユーティリティ
- Java Development Kit (JDK) バージョン 1.4。Oracle Workflow Java Function Activity Agent および Workflow XML Loader を実行するために必要です。
- 送信用 SMTP メール・サーバーおよび受信用 IMAP メール・サーバー (Oracle Workflow 通知メーラーによる電子メール通知の送受信が必要な場合)。

2.6 Oracle Database 10g Companion Products をインストールするための要件

Oracle Database 10g Companion Products をインストールする場合、システムが次の要件を満たしていることを確認する必要があります。

■ Oracle Workflow Server の要件

Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールする前に、Oracle Workflow Server が Oracle Database 10g の Oracle ホームにインストールされていることを確認する必要があります。

■ Oracle HTTP Server の要件

Oracle Workflow 中間層コンポーネントを実行するには、Oracle HTTP Server へのアクセスが必要です。Oracle Workflow 中間層コンポーネントは、Oracle HTTP Server とともに新しい Oracle ホームにインストールできます。

■ ディスク領域の要件

Oracle Database 10g Companion Products のディスク領域の要件を次の表に示します。

インストールする製品	必要なディスク領域 (MB)
Oracle HTTP Server	2100
Oracle HTTP Server および Oracle Workflow	2400

3 Companion CD 製品のインストール手順の開始

この項では、3つの各インストール・タイプを開始する方法を画面を使用して説明します。Oracle Universal Installer の画面は、3つのインストール・タイプでほとんど同じです。ただし、Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールする前に、まず Oracle Workflow Server をインストールして準備する必要があります。

Oracle HTML DB または Oracle Database 10g Products をインストールする場合は「[インストールの開始](#)」を参照してください。

Oracle Workflow Server をすでにインストールしている場合、Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールするには、最初に次の手順を実行する必要があります。

Oracle Workflow 中間層のインストールのための Oracle Workflow Server の準備

Oracle Workflow Server は、インストールした後、Oracle Workflow 中間層コンポーネントをインストールする前に構成する必要があります。Oracle Workflow の構成には Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを使用できます。次の手順では、グラフィカル・ユーザー・インタフェース (GUI) を使用して Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを実行する方法を説明します。

関連項目： 非対話モードでの Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの実行方法は、『Oracle Database Companion CD インストール・ガイド for Linux Itanium』の「非対話モードでの Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントの実行」を参照してください。

1. Oracle Workflow に使用する Oracle Database がアクセス可能で実行中であることを確認します。
2. Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを起動するために、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/wf/install/wfinstall.csh
```

3. 「Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントへようこそ」画面で、次の項目を指定します。
 - 「インストール・オプション」：「サーバーのみ」または「言語の追加」インストール・オプションを選択します。

「サーバーのみ」オプションを選択すると、Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントは Oracle Workflow を Oracle Database 内にインストールします。

注意： Oracle Workflow リリース 2.6.4 にアップグレードするには、既存の Oracle Workflow Server がリリース 2.6.2 以上であることを確認してください。

「言語の追加」インストール・オプションを選択する場合、追加する言語の略称を選択します。言語を追加する前に Oracle Workflow をインストールする必要があります。

関連項目： Oracle Database で使用される言語略称の一覧は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

- 「ワークフロー・アカウント」: Oracle Workflow データベース・アカウントに使用する名前を入力するか、デフォルトの名前（通常は owf_mgr）を受け入れます。

このアカウントのデフォルトの表領域は USERS で、一時表領域は TEMP です。表領域は必要に応じて変更できます。

注意： Oracle Workflow の既存のインストールをアップグレードする場合、既存の Oracle Workflow データベース・アカウントの名前とパスワードを入力してください。

- 「ワークフロー・パスワード」: Oracle Workflow アカウントのパスワードを入力します。
- 「SYS パスワード」: システム上の Oracle Database インストールの SYS アカウントに対するパスワードを入力します。
- 「TNS 接続ディスクリプタ」: データベース接続文字列を TNS 形式で指定します。

```
(DESCRIPTION = (ADDRESS_LIST = (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP) (HOST =  
host_name) (PORT = port_number))) (CONNECT_DATA = (SERVICE_NAME =  
database_service_name)))
```

接続文字列は tnsnames.ora ファイル内に格納されます。このファイルはデフォルトで \$ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリにあります。

4. Oracle Internet Directory を Oracle Workflow のディレクトリ・リポジトリとして統合する場合は、「LDAP パラメータを入力します」を選択して「LDAP の値の取得」を選択します。

注意：すでに Oracle Internet Directory の統合が実装された既存の Oracle Workflow インストールをアップグレードしている場合、アップグレード中に Oracle Internet Directory 統合を保存するために Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) の値をここで再入力する必要があります。

接続する LDAP ディレクトリに関する次の LDAP サーバー情報を入力した後、「OK」をクリックします。

注意：必要に応じて、インストール後「グローバル・ワークフロー・プリファレンス」Web ページ上でこれらの値を更新できます。

詳細は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』の Oracle Workflow の設定に関する項を参照してください。

- 「LDAP ホスト名」: LDAP ディレクトリがインストールされるホスト名を入力します。
- 「LDAP 非 SSL ポート」: ホストが使用するポート番号を入力します。このポートに Secure Sockets Layer (SSL) ポートは使用できません。
- 「LDAP 管理ユーザー名」: LDAP サーバーへの接続に使用されるユーザー名を入力します。このユーザー名は、書込み権限を持ち、LDAP ディレクトリにバインドする必要があります。

例：

cn=orcladmin

- 「LDAP 管理パスワード」: LDAP ユーザー・アカウントの Oracle Internet Directory パスワードを入力します。LDAP パスワードの値は、表示ではアスタリスク (*) でマスクされ、暗号化された形式で格納されます。
- 「変更ログ DN」: 変更ログ・ファイルがある LDAP ノードを入力します。

例:

cn=changelog

- 「ユーザー・ベース」: ユーザー・レコードが検索可能な LDAP ノードを入力します。

例:

cn=Base, cn=OracleSchemaVersion

注意: インストール時に Oracle Internet Directory との統合を設定した後、WF_LDAP API を使用して Oracle Workflow ディレクトリ・サービスを Oracle Internet Directory と同期化する必要があります。詳細は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』を参照してください。

5. シードされた Java ベースの通知メーラー・サービス・コンポーネントである Workflow Notification Mailer の構成パラメータを入力するには、「メーラー・パラメータを入力します」を選択して「メーラーの値の取得」を選択します。

次のパラメータの値を入力してから、「OK」をクリックします。

- 「電子メール・アカウントのインバウンド: サーバー名」: 受信用 IMAP メール・サーバーの名前を入力します。
- 「電子メール・アカウントのインバウンド: ユーザー名」: 通知メーラーが電子メール・メッセージを受信するメール・アカウントのユーザー名を入力します。
- 「電子メール・アカウントのインバウンド: パスワード」: 「ユーザー名」フィールドに指定されたメール・アカウントのパスワードを入力します。
- 「電子メール・アカウントのアウトバウンド: サーバー名」: 送信用 SMTP メール・サーバーの名前を入力します。
- 「電子メール処理: 処理済フォルダ」: 通知メーラーが正常処理された通知メッセージを入れるための、受信用電子メール・アカウント内のメール・フォルダの名前を入力します。
- 「電子メール処理: 削除フォルダ」: 通知メーラーが通知メッセージとして認識されない受信メッセージを入れるための、受信用電子メール・アカウント内のメール・フォルダの名前を入力します。
- 「メッセージ生成: HTML エージェント」: Oracle HTTP Server 内で Oracle Workflow 用に定義された Web エージェントを示すベース URL を入力します。通知メーラーは、HTML 添付の電子メール通知をサポートするためにこの URL を使用します。このパラメータは、デフォルトで次のプレースホルダ値に設定されます。

`http://localhost.com/pls/wf`

すでに Oracle HTTP Server がインストールされている場合、localhost.com を、Web リスナーがリクエストを受け入れるサーバーおよび TCP/IP ポート番号と置き換えます。インストールされていない場合、このパラメータはプレースホルダ値の設定のままにします。この場合、Oracle HTTP Server および Oracle Workflow をインストールした後、Oracle Workflow Manager の通知メーラー構成ウィザードでこのパラメータを設定する必要があります。

- 「メッセージ生成: 返信先アドレス」: 受信メッセージを受け取る電子メール・アカウントのアドレスを入力します。通知応答の送信はこのアドレスに対して行います。

最初のインストールの後、必要に応じて Oracle Workflow Manager で通知メーラーの構成値を更新できます。また、「グローバル・ワークフロー・プリファレンス」Web ページで Oracle Workflow の HTML エージェントの値を更新することもできます。

関連項目： 詳細は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』の Oracle Workflow の設定に関する項および Oracle Workflow Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。

6. Oracle Workflow のデータベース・アカウントに割り当てられた表領域を変更するには、最初に「表領域の変更」を選択し、次に値リストから既存の表領域を選択します。
7. 「送信」を選択して構成を開始するか、「終了」を選択して構成を実行せずに Oracle Workflow コンフィギュレーション・アシスタントを終了します。
8. 構成が完了すると、確認ウィンドウが表示されます。「OK」をクリックします。

構成の状況は、\$ORACLE_HOME/wf/install/workflow.log ファイルを調べることでチェックできます。

Oracle Workflow 中間層コンポーネントのインストールを開始する手順は、次の項を参照してください。

インストールの開始

Companion CD 製品のインストールを開始するには、次の手順を実行します。

1. インストール・メディアからインストールする場合は、ディスクをマウントします (マウントされていない場合)。
2. 必要に応じて Oracle ソフトウェア所有者ユーザー (oracle) としてログインし、DISPLAY 環境変数を設定します。
3. Oracle HTML DB をインストールする場合、Oracle HTML DB に使用する予定の Oracle Database がアクセス可能で実行中であることを確認します。
4. Oracle Universal Installer を起動するために、次のコマンドを入力します。

```
$ cd /tmp
$ /directory_path/runInstaller
```

このコマンドで、*directory_path* はインストール・メディアまたはハード・ドライブ上の companion ディレクトリのパスです。

5. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックします。
6. このシステムに Oracle 製品を初めてインストールする場合、Oracle Universal Installer は「インベントリ・ディレクトリと資格証明の指定」画面を表示します。次の情報を指定して、「次へ」をクリックします。

- 「インベントリ・ディレクトリのフルパスを入力してください」

パスが次のようになっていることを確認します。oracle_base は、Oracle ベース・ディレクトリのフルパスです。

```
oracle_base/oraInventory
```

- 「オペレーティング・システム・グループ名の指定」

指定されているグループが Oracle インベントリ・グループ oinstall であることを確認します。

次の項では、各インストール・タイプに固有の手順を説明します。

4 インストール時の製品固有情報の指定

インストールを続けるには、次のいずれかの項を参照してください。

- [Oracle HTML DB インストール・タイプ](#)
- [Oracle Database 10g Products インストール・タイプ](#)
- [Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプ](#)

Oracle HTML DB インストール・タイプ

この項では、次のいずれかのオプションを使用した Oracle HTML DB のインストール方法を説明します。

- **Oracle HTTP Server とともに Oracle HTML DB をインストール**: このオプションを選択すると、Oracle HTML DB が Oracle HTTP Server とともに新しい Oracle ホームにインストールされます。
- **既存の Oracle HTTP Server ホームに Oracle HTML DB をインストールまたはアップグレード**: このオプションを選択すると、インストールの前の状態に応じて、Oracle HTML DB がインストールされるか、既存の Oracle HTML DB インストールがアップグレードされます。

Oracle HTML DB 製品のインストールを続けるには、次の手順を実行します。

1. 「インストールする製品の選択」画面で「**Oracle HTML DB**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
2. 「インストール・タイプの選択」画面で次のいずれかを選択して、「**次へ**」をクリックします。
 - **「Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server」**: このオプションは、新しい Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server を新しい Oracle ホームにインストールするときに選択します。
 - **「Oracle HTML DB のみ」**: このオプションは、新しい Oracle HTML DB を既存の Oracle HTTP Server ホームにインストールするか、既存の Oracle HTML DB インストールをアップグレードするときに選択します。
3. 「ホームの詳細の指定」画面で次を入力します。
 - **「名前」**: 前の手順で「**Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server**」を選択した場合、新しい Oracle ホームの名前を指定します。「**Oracle HTML DB のみ**」を選択した場合は、既存の Oracle HTTP Server ホームの名前を選択します。「**Oracle HTML DB のみ**」を選択した場合、既存の Oracle HTML DB インストールが存在している場合は、この既存のインストールの Oracle ホームの名前を指定します。
 - **「パス」**: 「**名前**」で指定した Oracle ホームのディレクトリ位置を入力します。ディレクトリが存在しない場合、Oracle Universal Installer がそのディレクトリを作成します。
4. 「**次へ**」をクリックします。
5. 「製品固有の前提条件のチェック」画面で、Oracle Universal Installer がシステムをチェックしたときに発生した可能性があるエラーの有無を調べて修正します。「**次へ**」をクリックします。

「**次へ**」をクリックしたときに、警告メッセージが表示される場合があります。既存の Oracle HTML DB インストールがある場合、このメッセージは、このインストールに関連付けられているデータベース・アクセス記述子 (DAD) の必要なディレクトリの一部に、不十分または不適切な値があることを知らせています。この場合、アップグレードには適していません。この状態で Oracle HTML DB のアップグレードを続けるには、最初に問題を修正する必要があります。Oracle HTML DB をインストールする場合は、インストールを続けてください。

関連項目： DAD の構成の詳細は、『Oracle Database Companion CD インストール・ガイド for Linux Itanium』を参照してください。

「OK」をクリックして先に進みます。

6. このインストール手順で表示される画面は、Oracle HTML DB をインストールするか既存の Oracle HTML DB インストールをアップグレードするかにより異なります。

■ **Oracle HTML DB をインストールする場合**

「HTML DB データベースの詳細の指定」画面で、Oracle HTML DB の構成に必要な情報を入力します。

「ホスト名」

データベースがインストールされているシステムのホスト名を指定します。ホスト名がローカル・ホストの場合、コンピュータの名前を入力します。`localhost` ではありません。

「ポート」

データベース・システム上の Oracle Net Listener の TCP/IP ポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 1521 です。使用中の Oracle Database インストールのデフォルトのポート番号を検出するには、その `tnsnames.ora` ファイルを調べます。このファイルはデフォルトで `$ORACLE_HOME/network/admin` ディレクトリにあります。

「データベース・サービス名」

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをインストールするデータベースのデータベース・サービス名、たとえば `sales` を指定します。かわりにドメイン名を指定することもできます。ドメイン名は、通常、グローバル・データベース名、たとえば `sales.us.mycompany.com` と同じです。

Oracle HTML DB を構成するには、Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをリリース 9.2.0.3 以上の Oracle Database にインストールする必要があります。10g リリースの Oracle HTTP Server を使用する予定の場合、インストール時に指定する情報をもとに Oracle Universal Installer が自動的にデータベース・アクセス記述子 (DAD) を `mod_plsql` 構成ファイル内に作成し、ディレクトリの別名を Oracle HTTP Server の構成ファイルである `httpd.conf` 内に作成します。

「表領域名」

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをロードする表領域の名前を入力するか、デフォルト (`SYSAUX`) を受け入れます。

「SYS パスワード」

データベースの SYS ユーザーのパスワードを指定します。

「HTML DB パスワード」

Oracle HTML DB スキーマ (`users`) に使用するパスワードを指定します。このスキーマはインストール時にデータベース内に作成されます。

インストール後、このパスワードを使用して管理ユーザーとして Oracle HTML DB に接続できます。指定したパスワードは、`mod_plsql` がデータベースへの接続に使用する `HTMLDB_PUBLIC_USER` スキーマ、および `FLows_010600` と `FLows_FILES` のスキーマにも使用されます。

「HTML DB パスワードの確認」

パスワードを正しく指定したことを確認するために、再度入力します。

- **既存の Oracle HTML DB インストールをアップグレードする場合**

「HTML DB アップグレード情報の指定」画面で、アップグレードする Oracle HTML DB インストールを、使用可能な DAD のリストから選択します。

アップグレードする Oracle HTML DB インストールを指定すると、ホスト名、ポートおよびデータベース・サービス名の値がそれぞれのフィールドに自動的に表示されます。これらの値は変更できません。残りのフィールドは、「HTML DB データベースの詳細の指定」画面で表示されるものと同じです。

7. 「次へ」をクリックします。

8. 続きは「[インストールの完了](#)」を参照してください。

Oracle Database 10g Products インストール・タイプ

Oracle Database 10g Products のインストールを続けるには、次の手順を実行します。

1. 「インストールする製品の選択」画面で、「**Oracle Database 10g Products**」を選択して、「次へ」をクリックします。
2. 「ホームの詳細の指定」画面で次を入力します。
 - **「名前」**: このフィールドには、デフォルトの Oracle ホームが表示されます。指定された Oracle ホームが Oracle Database の Oracle ホームであることを確認します。
 - **「パス」**: このフィールドには、デフォルトの Oracle ホームのディレクトリが表示されます。Oracle ホーム・ファイルをインストールする Oracle Database の Oracle ホームのディレクトリ位置を入力します。
3. 「製品固有の前提条件のチェック」画面で、Oracle Universal Installer がシステムをチェックしたときに発生した可能性があるエラーの有無を調べて修正します。
4. 続きは「[インストールの完了](#)」を参照してください。

Oracle Database 10g Companion Products インストール・タイプ

Oracle Database 10g Companion Products のインストールを続けるには、次の手順を実行します。

1. 「インストールする製品の選択」画面で、「**Oracle Database 10g Companion Products**」を選択して、「次へ」をクリックします。
2. 「ホームの詳細の指定」画面で次を入力します。
 - **「名前」**: Oracle ホームの名前を入力します。Oracle Database 10g Companion Products は、新しい Oracle ホームにインストールできます。かわりに、Oracle Workflow 中間層のみを既存の Oracle HTTP Server Oracle ホームにインストールできます。Oracle Database 10g Companion Products を既存の Oracle Database のホームにインストールすることはできません。
 - **「パス」**: Oracle ホームのディレクトリ位置を入力します。ディレクトリが存在しない場合、Oracle Universal Installer がそのディレクトリを作成します。
3. 「使用可能な製品コンポーネント」画面で、次の製品の 1 つを選択します。
 - **Apache Standalone**
 - **Oracle Workflow 中間層**

注意: Apache Standalone オプションでは Oracle HTTP Server がインストールされます。Oracle Workflow 中間層を新しい Oracle ホームにインストールする場合、Apache Standalone オプションを選択する必要があります。

4. 「製品固有の前提条件のチェック」画面で、Oracle Universal Installer がシステムをチェックしたときに発生した可能性があるエラーの有無を調べて修正します。

Oracle Workflow 中間層のみを既存の Oracle HTTP Server の Oracle ホームにインストールする場合、選択された Oracle ホームが存在することを手動で確認する必要があります。「次へ」をクリックします。

5. 「Oracle Workflow 中間層の構成」画面で、Oracle Workflow 中間層に必要な構成設定を指定します。

Oracle Workflow 中間層を構成するには、mod_plsql 構成ファイル内に DAD を作成し、Oracle HTTP Server 構成ファイル内にディレクトリの別名を作成する必要があります。Oracle Universal Installer は、指定された情報を使用してこれらのタスクを実行します。

次の情報を入力します。

- 「ワークフロー・スキーマ」

Oracle Workflow Server のデータベース・オブジェクトをデータベースにインストールしたときに使用したユーザー（スキーマ）名を指定します。デフォルトのユーザー名は owf_mgr です。

- 「DB ホスト名」

データベースがインストールされているシステムのホスト名を指定します。ホスト名がローカル・ホストの場合、コンピュータの名前を入力します。localhost ではありません。

- 「ポート番号」

データベース・システム上の Oracle Net Listener の TCP/IP ポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 1521 です。

- 「Oracle SID」

Oracle Workflow Server のデータベース・オブジェクトをインストールしたデータベースのシステム識別子（SID）を指定します。

6. 「Oracle Workflow 中間層の構成」画面で、前の手順で作成した Oracle Workflow スキーマのパスワードを入力します。「次へ」をクリックします。

7. Oracle Apache インストール画面で、次の情報を入力して、「次へ」をクリックします。

- 「パスワードを入力」

前の画面で指定した Workflow ユーザー（通常は owf_mgr）のパスワードを指定します。このパスワードは、mod_plsql DAD に使用されます。

- 「パスワードの確認」

パスワードを正しく指定したことを確認するために、再度入力します。

8. 続きは「[インストールの完了](#)」を参照してください。

5 インストールの完了

この項では、すべてのインストール・タイプに共通の Oracle Universal Installer 画面について説明します。インストールを完了するには、次の手順を実行します。

1. 「サマリー」画面で、インストールされる製品のリストをチェックして、「インストール」をクリックします。
2. プロンプトが表示された場合、別の端末ウィンドウで、次のスクリプトを root ユーザーとして実行します。

注意： この画面は、Oracle Database 10g Products インストール・タイプの場合には表示されません。

```
oracle_base/oraInventory/orainstRoot.sh
oracle_home/root.sh
```

このディレクトリ・パスで、`oracle_base` および `oracle_home` は、それぞれ Oracle ベース・ディレクトリおよび Oracle ホーム・ディレクトリのパスです。

両方のスクリプトの実行後、「OK」をクリックします。

3. インストールの終了画面で、Oracle HTTP Server により使用される URL を書き留めます。
4. 「終了」をクリックしてから「はい」をクリックして Oracle Universal Installer を終了します。

6 インストール後の作業

Companion CD 製品をインストールした後、次の手順を実行します。

- 『Oracle Database Companion CD インストレーション・ガイド for Linux Itanium』の Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動に関する項の手順に従って、Oracle HTTP Server を起動します。
- インストールの最後に表示された URL を使用して、Web ブラウザで Oracle HTTP Server のホーム・ページにアクセスします。デフォルトの URL は、次のようになります。

```
http://host.domain:7777/
```

- Web ブラウザで Oracle HTML DB の管理ページにアクセスします。

```
http://host.domain:7777/pls/htmldb/htmldb_admin
```

ユーザー名 ADMIN およびインストール時に指定したパスワードを使用して、Oracle HTML DB にログインします。

- オンライン・ヘルプおよび『Oracle HTML DB ユーザーズ・ガイド』を参照して、Oracle HTML DB の使用方法、Oracle HTML DB を使用したアプリケーションの開発方法、および Oracle HTML DB の管理方法を習得します。
- 『Oracle Database Companion CD インストレーション・ガイド for Linux Itanium』の第 4 章「インストール後の作業」を参照して、他のインストール後の作業を確認します。

7 ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。アクセシビリティの標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし一部のスクリーン・リーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

8 サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル製品サポートの購入方法、およびオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

Oracle Database Companion CD クイック・インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.2) for Linux Itanium

部品番号 : B25925-01

原本名 : Oracle Database Companion CD Quick Installation Guide, 10g Release 2 (10.2) for Linux Itanium

原本部品番号 : B15679-01

Copyright © 2005, Oracle.All rights reserved.

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software—Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかえる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万が一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、および Retek は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。